

国際協力に携わるのは今回の事業が初めてという原口さんだが、実は原口家は国際協力一家。ご主人の原口清史さんは北九州市の職員時代に、北京の日中友好環境保全センターに3年間赴任。退職後は、(財)北九州市国際技術協力協会(KITA)に所属し、JICAの研修事業も担当している。また、国土交通省に勤務する長女の原口祐子さんも、港湾関係の国際協力に携わる。祐さんが幼いころは、アジアやアフリカから来た研修員を家に呼んで郷土料理を振る舞うなど、交流機会も多かったそうだ。



2007年に廃棄物対策の専門家としてパキスタンに行ったご主人の清史さん(左)



事業で水門や川沿いの遊歩道(右写真)が整備されつつあるが、川に流入する水路にはまだごみがあふれている



無収水対策のためのマルチメディア教材が完成

水道分野への支援も積極的な北九州市。開発途上国では水道管からの漏水や盗水など「無収水」の問題が深刻なことから、JICAとともに無収水対策支援を行ってきた。その経験を集約した視聴覚教材「水道事業における無駄な水を減らす取り組み～総合的な無収水管理」が北九州市水道局と東京都水道局の協力の下、(株)クボタ顧問の山崎章三氏の制作・監修により3月に完成。貴重な水資源を有効利用し、水道事業を健全に運営するノウハウがまとめられている。JICAのホームページ(<http://www.jica-net.com/ja2/>)で閲覧可能。



探知機で漏水音を調べる様子(カンボジア)も収録されている

プロジェクトを主導する原口公子・北九州市環境局環境科学研究所環境研究課長はまず、ゴムボートでカリマス川を下り、水質の現状を自分の目で確かめた。その上で、「川の汚れの原因が生活排水であることを住民と行政がきちんと認識す

公害を克服した経験を生かして

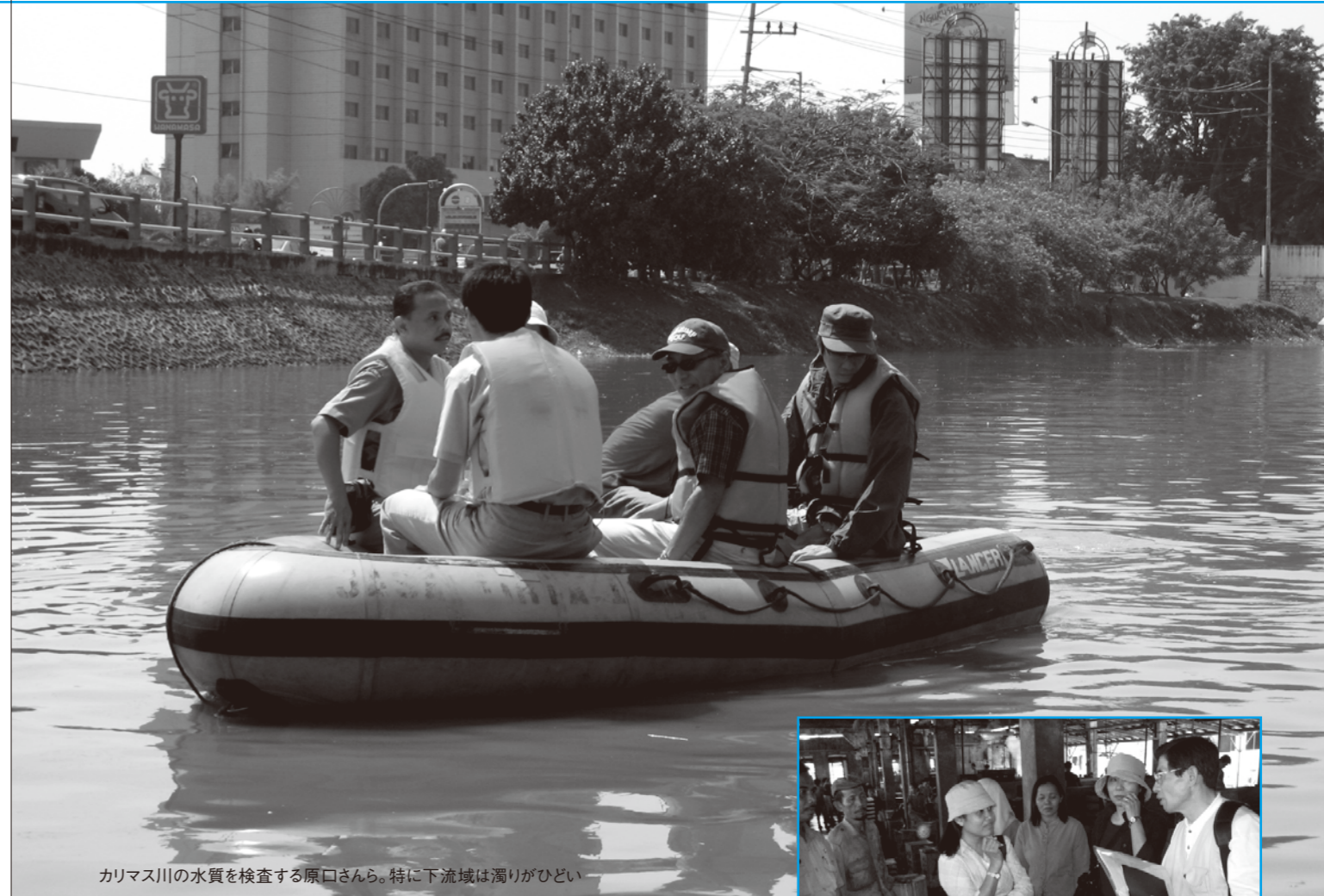
1997年から廃棄物対策の分野でも北九州市の協力を受けていたスラバヤ市にとっては、信頼関係で結ばれた願ってもないパートナーだ。
2007年、北九州市はJICAと連携して「スラバヤ市水質管理能力向上事業」※2を開始し、職員を派遣するなどして、モニタリングやデータ解析を担う人材の育成に取り組んでいる。

また、スラバヤ市の職員を北九州市に送り、河川と周辺の公園、道路、市街地などを計画的に整備してきた市の取り組みを学ぶ研修を実施。彼らからは

「日本の技術をそのまま利用することはできないので、スラバヤに合ったものに活用していくことが大切」と原口さんは話す。
また、スラバヤ市の職員を北九州市に送り、河川と周辺の公園、道路、市街地などを計画的に整備してきた市の取り組みを学ぶ研修を実施。彼らからは

「日本のような下水道を造るためにはどうすればいいのかわからない」といったスケールの大きい質問も飛び出した。まずは水質改善という目の前の目標を地道にクリアしていくことが重要」と原口さんは説明している。
北九州市は06年度より「アジアの環境人材育成拠点」を目指し、5年間で2000人の研修員を受け入れる人材育成に取り組んでいる。また、アジアの諸都市とネットワークを構築して国際協力を積極的に推進している。負の経験を、強みに変えた北九州市は、まさしく日本の環境国際協力に不可欠なプレイヤーだ。

「日本のような下水道を造るためにはどうすればいいのかわからない」といったスケールの大きい質問も飛び出した。まずは水質改善という目の前の目標を地道にクリアしていくことが重要」と原口さんは説明している。
北九州市は06年度より「アジアの環境人材育成拠点」を目指し、5年間で2000人の研修員を受け入れる人材育成に取り組んでいる。また、アジアの諸都市とネットワークを構築して国際協力を積極的に推進している。負の経験を、強みに変えた北九州市は、まさしく日本の環境国際協力に不可欠なプレイヤーだ。



カリマス川の水質を検査する原口さんら。特に下流域は濁りがひどい



豆腐工場や牛の解体場などを視察し、排水について聞き取り調査を行う原口公子さん(右から2人目)とスラバヤ市の職員

PLAYERS

国際協力の担い手たち

北九州市の経験をスラバヤ市へ

インドネシア・スラバヤ市では、市内を流れるカリマス川に生活排水が流れ込み、水環境が悪化している。公害から奇跡の復活を遂げた北九州市は、その経験を生かし、川の水質改善を担う人材の育成に協力している。

カリマス川を町のシンボルに

生活排水はカリマス川へ垂れ流し、流域にはごみの不法投棄も。だが人々は気にする様子もなく、川で泳ぎ、釣りを楽しむ——こうした光景がごく当たり前のスラバヤ市。インドネシア第2の都市として急速に工業化・都市化が進む同市では、生活排水や工業排水が増え、川の水質汚濁が深刻な問題になっている。

そんなカリマス川を名実ともにスラバヤ市のシンボルとして復活させるべく、同市は治水対策に加え、商業施設や公園、遊歩道などの親水空間の整備を兼ね備えた「カリマス川再生事業」を開始した。全長12キロの川沿い9地区を重点地域とし、水環境の改善、都市アメニティ※1の向上、観光振興などに取り組む。

川の水質改善から取り掛かるが、改善計画の立案に必要なモニタリングやデータ解析が適切に行われていなかった。そこで支援に「肌脱いだのが、北九州市。高度経済成長期に発生した公害による「ばい煙の空」「死の海」を克服してきた北九州市には、その過程で培った技術や人材が蓄積されている。すでに